



TITLE:

奇形歯に関する研究とくに犬歯多
歯根症についての形態病理学的研
究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

内藤, 茂

CITATION:

内藤, 茂. 奇形歯に関する研究とくに犬歯多歯根症についての形態病理学的研究. 京都大学, 1961, 医学博士

ISSUE DATE:

1961-12-19

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/210822>

RIGHT:

氏 名	内 藤 茂 ない とう しげる
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 11 号
学位授与の日付	昭 和 36 年 12 月 19 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	奇形歯に関する研究 とくに犬歯多歯根症についての形態病理学的研究
論文調査論文	(主査) 教 授 鈴 江 懐 教 授 岡 本 耕 造 教 授 美 濃 口 玄

論 文 内 容 の 要 旨

人歯は一般に各歯種に應じて一定の歯根数が有るとされているが、時々それが過剰に現われることがある。これは歯科病理学的には多歯根症と呼称せられ、奇形歯として取り扱われている。ところが、その発生原因については、歯の進化過程における復古形説や歯胚の発育の異常に起因する発育異常説などがあるが、未だ定説はない。そこで著者は先年来、多数の邦人複根性犬歯を蒐集し、それについてその実態の把握と成因の究明につとめ、若干の興味ある知見を得た。その研究成果の概要を摘記すると次のごとくである。

- 1) 複根性犬歯の各部の計測値と重量は標準（平均）値に比べ、総じてその発育は劣っていた。
- 2) 根の分岐は根の中央よりやや根尖側寄りのものが過半数を占め、分岐程度は 51° ～ 60° のものが最も多く、根の走行は唇舌側根とも遠心側に傾斜するものが最も多く、根尖は唇舌側根とも唇側に向うものが最も多かった。
- 3) 根頸部にみられる発育溝の発現状況は上顎例では近遠心側における差異はないが、下顎例では近心側のものは深くて狭いものが多く、遠心側のものは反対に浅くて広いものが多く、発育溝の歯冠エナメル質への侵入は近心側においてのみ少数例認めた。
- 4) 歯冠各部の発育は劣勢なものが多く、歯冠ならびに歯根の表面性状については、著明な Hypoplasie としての所見は見られなかった。
- 5) 舌面基底結節の発育の良好なものは根の分岐部位が歯頸側寄りで、分岐度の大なるものに多く見られ、舌面隆線の発育と根の分岐部位ならびに分岐程度との間にも基底結節の場合と全く同じ関連性がみられた。
- 6) 唇舌側根の発育程度（長さ）と根の分岐部位との関連において、分岐が歯の発育の末期に現われると分岐両根がほぼ均等の発育を示し、比較的初期に分岐が生ずると分岐両根の発育に差が生じる傾向がみられた。そして、発育溝の深さと分岐程度との関係をみると、分岐程度の大なるものに深いものが多く、

分岐程度の小さいものに浅いものも多く、他方、遠心側では分岐程度の大小との関連はみられず、総体的に浅い。

7) 歯髓腔の形態について

a, レ線的に観察すると、根管は唇舌側両根とも単純根管が大多数で、その大きさは唇側根では普通程度、舌側根では狭窄されたものが過半数を占め、根尖孔の単純性は単根性犬歯の場合と大差を認めなかった。そして分岐部の髓床底の形態は上下顎ともU字形のものがV字形に比べて多く、V字形は高位分岐ならびに分岐程度の大なるものに多く、U字形は全く反対であった。

b, 歯髓腔内墨汁浸潤歯牙透明法により髓床底付近に副根管（高位管外側枝）を多数例に認めその発現は唇舌側根ともに見受けられ、分岐間側に開口していた。これらの所見はレ線像では不分明であり、歯髓腔内墨汁浸潤歯牙透明法により、はじめて認識できる知見であり、形態学的にはもちろん、臨床的にも大なる実益をもたらす事項である。

8) 犬歯多歯根症の成因については、その発現が下顎に多く、上顎ではきわめて稀有であり、根の分岐はすべて唇舌の方向である点から、系統発生学的意義のほかに、歯胚と顎骨の発育との関連性が重要な因子として考えられる。そして犬歯多歯根症が復古形を意味するとも思えるが、それ自体は単根性犬歯に比べて劣形成であることが本研究の結果から理解できた。

論文審査の結果の要旨

人歯は各歯種に応じて一定の歯根数があるとされているが、時にそれが過剰に現われることがあり、そのような場合、歯科病理学では多歯根症と呼び、奇形歯として取り扱っている。そして、その成因については、歯の進化過程における復古現象であるとの説や、歯胚の発育異常に基因するとの説などがあり、未だ定説はみられない現状である。そして、従来、この種、多歯根症に関する業績発表はあるが、いずれも1例ないし数例についての症例報告にとどまり、とくに、上顎犬歯については内外文献を通じてわずかに数例の報告をみるのみで、形態学的ならびに病理学的に未解明な幾多の問題を蔵しているのである。そこで著者は先年来、多数の分岐根犬歯を、肉眼的、X線のならびに歯髓腔内墨汁浸潤歯牙透明法などにより、詳細な形態学的観察を行ない、その実態の把握と成因の究明に努め、さらに臨床面の実際に関連ある数多くの知見を得た。なかでも特筆すべき成績は複根性犬歯の発育が正常歯にくらべ劣勢であることを計測、秤量および肉眼的形態の結果から認識し得たことであり、さらに根の分岐が歯の発育初期のものほど各根の発育に差の生ずる傾向を認め、また、歯髓腔内墨汁浸潤歯牙透明法の応用により、レントゲンのには到底望みえない根管形態の詳細な所見を観察しえたことは形態学的にはもちろん、臨床的にも、とくに根管治療に際してきわめて実益をもたらすものである。

以上のごとく、著者は、従来きわめて報告がとぼしかった犬歯多歯根症を豊富に蒐集して、各種の詳細な観察検討を試み、学理的のみならず、臨床的の実際面においても多くの有益な新知見を加えたのであって、医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。